優秀賞

過去の失敗から得たもの

岡山大学教育学部附属中学校　1年　足立　友梨奈

私には「小児期発症流暢症」という、言葉が円滑に話せない障害がある。大人には何となく知っているという人も少なくないが、子供の認知度は低い。幼稚園の頃から今まで出会ってきた人の中で、不思議に思った人もいるだろう。それを感じていた私は、人前で話す時失敗することを恐れ、ずっと聞き手になり、いつしか「話を聞いてくれる人」のポジションができあがってしまっていた。しかし、一度だけ言葉がつまりながらもやめなかったことがある。それは、小学校一年生の時の音読大会だ。小さいころに、発表でつまった時の空気が嫌で、「一日一回発表をしましょう」というめあては、簡単な場面で済ましていた。しかし、音読大会となるとクラス全員に回るため、当然読まなければならない。たった八行ほどの短い詩だったが、待っている間も苦痛でならなかった。そして、ついに読む番が回ってきた。予想通り、何度もつまった。失敗した、と思った。それでも、一生懸命読んだ。すると先生はとても大きな拍手をくれた。クラスの人も、つられて拍手をしてくれた。そして、私は優勝することができた。私はその時の先生の優しさを今でも忘れない。その後は、積極的に発表するようになり、小学校五、六年では、全校生徒の前でお礼の言葉を言えるくらいまで成長することができた。そんなある日、代表委員会という、四〜六年生の代表者が集まって話し合いを行う会が開かれた。私はその会の副議長として、進行をしていた。すると、ある四年生の子が、私と同じとみられる言葉のつまり方をしていた。とても時間がかかっており、まわりは聞く気を持っていなかった。しかし、私は最後まで聞き、大きな拍手をした。あの時の先生のように、少しでも救いになれたら、と思ったからだ。私の行動がどう思われたかはわからないが、今後も私の障害の子だけでなく、みんなの心を少しでも軽くする、そんな行動をとりたいと思っている。